

梁川紅蘭の漢詩における夢

ドー・ティ・マイ (東京大学大学院 人文社会系研究科 外国人研究員)

研究背景

・漢詩人梁川紅蘭の詩集『紅蘭小集』、『紅蘭遺稿』に収録されている漢詩作品において「夢」という語を頻繁に使用した。
・「夢」を登場させる作品は、大きく二つのグループに分けられる。
(1) 夢の内容そのものを描写する詩。
(2) 夢の内容には触れず、「夢から覚めた」経験を契機として現実の光景を描く詩。

研究内容

夢の内容

- ① 夢中接得家中信 夢の中に家中の信を接し得たり
説尽別来無限情 説き尽くす別来無限の情を
- ② 残灯背影閑刀尺 残灯影に背いて刀尺閑に
孤枕和愁夢弟兄 孤枕愁に和して弟兄を夢む

詩人の願望の伝達

- ③ 思帰三歳未能帰 帰らんことを思うこと三歳にして未だ帰る能わず
紅燭依微照曉幃 紅燭依微として曉幃を照らす
- ④ 西征千里更西征 西征千里更に西征
雲態山容閑遠情 雲態山容遠情に関する

詩人の願望を詠む詩

「夢醒」

- ⑤ 鶯歌百囀好音流 鶯歌百囀して好音流がる
残夢回邊雨已収 残夢回る邊雨已に収まる
竹葉柳枝光欲滴 竹葉柳枝光滴らんと欲す
一庭曉色綠油油 一庭の曉色綠油油
- ⑥ 半夜西風殘夢醒 半夜西風殘夢醒む
叮噀已響女郎砧 叮噀已に響く女郎の砧

眼前の光景の描写

- ⑦ 黃鳥迎春方睨睨 黃鳥春を迎えて方に睨睨
素梅欺雪已嬋娟 素梅雪を欺いて已に嬋娟
- ⑧ 殘月曉鐘鳧水隈 殘月曉鐘鳧水隈
洗來芋爛白成堆 芋爛を洗い來りて白、堆を成す
筠籠爭買重新味 筠籠争い、買いて新味を重んず
兒女炎風携雪回 兒女炎風に雪を携えて回る

詩人が眼前の光景を描写する詩

研究目的

- ・「夢」= モチーフとして、紅蘭の漢詩でどのような役割を持っているかを明らかにすること。
- ・「夢」= 詩語として、紅蘭がどのように意識し、詩作においてどのように用いていたのかを検討すること。

夢：隠された無意識的な願望が実現された姿である。
(フロイトの夢理論)

→ 詩で詠まれる夢の内容は詩人自身の願望を反映したものである。

・夢の内容の変容=詩人の内面的変化：

若き日の紅蘭：故郷や家族、帰郷の夢を多く詠む=旅人の夢である。

放浪生活に慣れるにつれて故郷と家族への懐かしさは次第に薄れ、そうした夢も姿を消していった。その結果、作品にこのような夢が詠まれることはなくなる。
(作品年代順に追うことで)

詩において「夢を見る」ことを詠むのは、詩人が用いる一つの詩的技法

であると考えられる。

願望を直接詩(③・④の事例)に詠み込む方法に代えて、「夢」を詠む表現方法を用いること(①・②の事例)は、詩における「願望の伝達」の手法を多様化するものである。

詩語としての役割=詩作技法

「夢」：眠りの中で見る非現実世界と
「覚」：目覚めた状態で見る現実世界の対置(対比的構造)

・「夢から覚める」という契機として現実の光景を取り上げること→作品に一層強い現実感を与える効果であろう。

= 詩人の生活における光景

(⑤・⑥の事例)

・事物をそのまま描写するとは異なる表現効果である。(⑦・⑧の事例=自然における光景)

結論

・詩において詠まれる夢の内容を理解することは、詩人の内面を読み解く手がかりとなるだけでなく、「夢」という詩語が詩作においてどのような役割を果たしているのかを明らかにするうえでも重要である。

・紅蘭の場合、「願望」、「非現実世界」という夢の二つの特徴に基づき、「夢」という詩語の使用は、詩人が特定の表現目的を多様化するための詩作技法として機能している。

参考文献：

- ・荒木浩『夢と表象』勉誠社、二〇一七年。
- ・フロイト(金閨猛訳)『夢解釈』中央公論新社、二〇一二年。
- ・鈴木健一『近世文学史論』岩波書店、二〇二三年。
- ・梁川星巖全集刊行会『註解梁川星巖全集第四巻』梁川星巖全集刊行会、一八五八年。